

今日、慌しを通り 初めて「子どもたちに豊かな文化」実行委員会活動を知りました。費用、人、会場の理解など大変なことに多いと思える。たくさん協力者を得て息長い活動を続けていってほしいと願っています。

私自身フリーアナウンサー業としており、ラジオCMをはじめ、イベント、講演会司会などもしています。司会、進行、アナウンスなどでのお手伝いは必要時はいつでもご一報下さい。「子どもたちに豊かな文化」実行委員会と書いていただければすぐにお知らせします。

皆様の支援の活動に心よりお礼申し上げます。



会場を待つ子どもたち



全国から寄せられた義援金で、

子どもたちに豊かな文化を

前ページのように、あなたの地域で、子どもたちに豊かな文化を求めている人達とネットワークをつくり、一緒にいろんなイベントを計画しませんか？

全教神戸書記局へご連絡下さい。「子どもたちに豊かな文化を」実行委員会は、資金面・会場探し・イベントの紹介等、そのお手伝いをさせていただきます。



目次

- 公的支援について・・・P1・2
- 被災地では・・・P3・
- 地震防災と理科教育・学校・・・P4・5
- 成功した「春休み子ども劇場」・・・P6・7
- 手紙・イベント募集・など・・・P8

データで見る被災地 (5月5日現在)

- 仮設住宅での孤独死・・・211人
- 仮設住民の就業率・・・23%
- 仮設住民の平均年齢 66,1才
- 神戸市人口 142万4445人 (震災前より-2540人)



被災地だより これ以上人災による犠牲者を出さないために

強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ

全教神戸市教職員組合「絆編集係」

神戸市中央区下山手通

4・13・9中尾ビル3F

TEL-078-391-7508

FAX-078-391-8549

〒振込口座番号 01170-7-29732

絆



第5号 1998・5・17

被災者の願いにほど遠い

98年5月14日



「再建支援法案」可決



震災3年4ヶ月目を迎え、被災地では益々その復興の格差が広がっています。なんとか個人の努力で頑張っていた方々も、全国的な不況に加え、今までの様々な援助が期限切れになったり、借金の返済が迫られるなど、どうしようもない状態に追い込まれる事態になっています。

被災者にとって最後の頼みの綱として待ち望んでいた「公的支援」でした。しかし今国会で可決された「再建支援法案」は、その願いとはほど遠いものです。

被災者が求めている「市民立法」との違いを、「救援復興兵庫県民会議」のニュースをもとにまとめてみました。

給付分減額？措置なお不透明 怒り半ばあきらめ

被災者生活再建支援法案の成立に向かって国会での手続きが進む一方、阪神大震災の被災者に対する救済で復興が進むとは思えない」との声が上がる。

(神戸新聞)

措置がどうなるかは、いまだに不透明なままだ。すでに支給の始まった生活再建支援金と中高年自立支援金の支給額を差し引くとの見通しに、被災者は「怒るよりのあきらめムードも漂い、「この程度で復興が進むとは思えない」との声が上がる。

「生活再建支援法案」は、

阪神淡路大震災には適用されず、
付帯決議で「概ね相当する程度の支援措置」
とされています。
被災地にとって具体的にはこれからが大切です。

- 法案の支給対象と、支給額は、
- * 住宅が全壊した世帯に限られ、
 - * 年収 500 万以下の世帯には、最高 100 万円
 - * 年収 500 万を越える場合
世帯主が 60 才以上なら、
年収 800 万円以下 最高 50 万円
 - * 45 歳以上は
年収 700 万円以下に限って、最高 50 万円
 - * 要介護世帯で、年収 800 万円以下なら、
年齢に関係なく 最高 50 万円
- このようになっています。

この条件を、被災地に適用すると、

支給対象者は、被災者のわずか 8.3%...79182 世帯にすぎません。
しかもすでに支給されている支援金との併給は認められず、
支給方法も月額を基準に分割支給される公算が大きいとされています。

- * 被災地と被災者の現状を直視して下さい。最高 100 万円、それも限定された対象者で被災者は救われるでしょうか？このままでは、被災地の矛盾は大きくなるばかりです。国民のために働く議員さん！もう一度考えて下さい。
- * 個人の自営業者の全壊した事務所や営業所に対しても、災害被害支援をすべきです。この支援がないために事業再開できない事業主も多くいます。この人達に対しても支援の手をさしのべてほしいです。

被災者支援の立場に立った運動を続け、法案の実質的な修正を
求めていきましょう。

超党派議員で作った 災害被災者等支援法

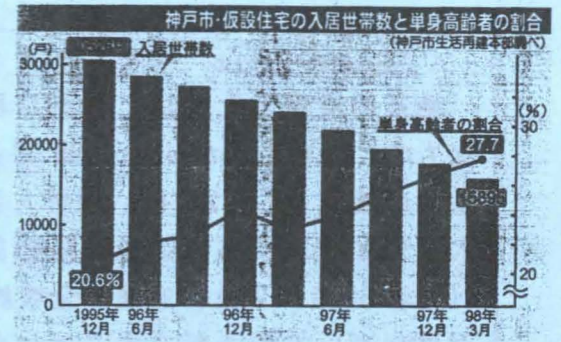
支給対象・支給金額
前年度所得 2000 万円以下で、
全壊・半壊すべての世帯
* 全壊...上限 500 万円
* 半壊...上限 250 万円
貸付制度・限度額 500 万円
(対象世帯数見込み
・46万5千世帯)
給付総額 1兆 950 億円
銀行等への公的資金の 1/30

被災者が求める
(市民立法)



仮設では深刻な事態

仮設に住んでおられる方々は 98 年 3 月現在
15895 人、そのうち行き先が決まってい
ない入居者は 4700 世帯にのぼっています。
災害公営住宅の入居が進むにつれて、仮設に
取り残される単身高齢者の割合が入居者の
27.7%と、急速に増え、3 月現在 4399 人
になり、深刻な事態になっています。(グラフ1)



(*1) (神戸新聞)

被災地の学校は今

震災後の 1 年間、神戸市
灘区内の中学校で教育復興
担当教員を務めた賀川信紀
教諭(現・同市北区の市立
大池中)は「震災直後の学
校では、日ごろ授業中に騒
いでばかりいた生徒もまじ
めになっていった。先生が自
分のことを心配してくれ、
友達にも会える学校という
存在は、安心できる場所だ
ったのだが、時間がた
つにつれてその意識も薄れ
てきたのでは」と話す。
震災のため校舎を建て替
えた兵庫県内の公立学校 54
校の工事は先月までにすべ
て終了。元通りの学校生活
が送られているように見え
る。しかし、昨年 7 月に同
県教委が行った調査では、
「心の健康についてケアが
必要」と判断された公立小
中学生は 4089 人にのぼ
り、一昨年同期より 27.7
人も増えていた。この傾向
は現在も続いているので
は、と見られている。

98・4・17

神戸市立禰田小で教育復
興担当教員を務める池見宏
子教諭は「転居や経済的事
情など環境の変化でストレ
スをため込んでいる子ども
が潜在的に増えている。今
こそ学級定数削減などで子
どもの話をじっくり聞ける
ような枠組み作りが急務
だ」と指摘する。
今回の調査結果につい
て、京都女子大の小田義彦
名誉教授(心理学)は「心
の傷の回復の速さには個人
差がある。回復に時間のか
かる子が、周囲に取り残さ
れる不安などを感じないよ
う、よりきめ細かな配慮が
先生や親に望まれる時期に
なっている」と話している。

求められる
子どもに安心を

●編集室から 今回の調査で気が
なることがあり
ます。「先生が疲れている」との印象
を持つ児童や生徒が、被災地で、2年
前に比べ、6.2%も増え、被災地外よ
りも多いことです。
震災直後の避難所の運営や被災児の
ケアなど「非常時の対応」、その後の
「教室再建」に向けての苦労で疲労が
蓄積しているのかもしれない。先生

毎日新聞震災特集より

たち自体、被災者のケースも多いと思
います。
この調査結果から改めて読んだのが
3月30日付の「教職員の4割がストレ
ス障害」という朝刊の記事です。震災
ほぼ 2 年後の昨年春、兵庫県精神保健
協会が被災地の小中学校の教職員を対
象に実施した調査をまとめたものでし
たが、一般の人の 4 倍の発生率という
というデータでした。

学校にゆとりを

ただ、救いは被災地の子どもで「先
生になりたい」と答えたものが多かつ
たことです。震災後の奮闘ぶりが印象
に残っているからでしょう。

地震防災と理科教育・学校

榎谷中学校・嘴本 格

—1995年兵庫県南部地震が学校と教育に突き付けた課題—

(地質学論集 第51号より)

はじめに

地震の規模としては、特別に巨大なものとは言えなかった1995年兵庫県南部地震(M.7.2)は、阪神・淡路大震災と呼ばれる戦後最大級の災害(死者6000人以上、家屋の全壊約10万戸など)を引き起こすことになった。その原因はどこにあるのかの解明は、かかわりのあるすべての分野で多面的に行われなければならない。その一つの要因として、多くの人々の間に構造物の耐震性について「関東大震災級の地震に耐えられる」という迷信と、大地震の可能性について「近畿地方には大地震はない」という思い込みが広まっていたことがある。その背景には非科学的な態度や、科学の成果に対する軽視や理解の不徹底があったとはいえないだろうか。

一方、学校関係や教育の分野でも、多くの団体・個人が今回の震災の原因や対応についての反省や今後への提言(神戸市教育委員会、1996;神戸市立校団長会、1996;全教神戸市教職員組合、1997など)を出している。それらは学校と教育が突き付けられた課題の重大さを示している。今後、日本の各地での地震防災を考える上で、学校と教育が今回の震災から何をどのように学び、何を教訓とする

かはきわめて重大な課題である。

ここでは第一に、大地のことを知る市民の権利を保障し、防災意識を高めるために果たすべき理科教育のあり方について考える。次に今回の震災において、学校と教職員が果たした役割をかえりみて、地域防災計画の中での学校・教職員の役割と、学校での防災体制について考察する。

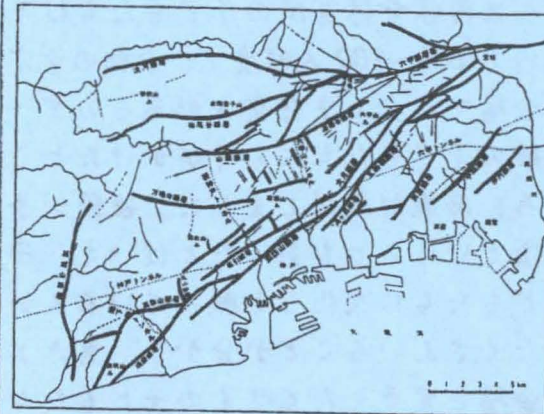
科学の成果と市民意識

淡路・神戸・阪神間の諸都市の多くの市民にとって、兵庫県南部地震は「寝耳に水の大地震」であった。ほとんどの市民(95%以上)は大地震を想定していなかった。積極的に「関西に大地震はない」と思い込んでいた人、消極的に「地震のことなど考えたことがなかった」人などその意識はさまざまであった。中には「確かに、神戸は大地震が来ないところだと教えてもらった」という人までいる。

個人のレベルだけでなく、行政レベルや各種団体においても、今回のような震災を想定している例はほとんどなかった。神戸市の地域防災計画では震度5を想定していたにすぎなかった。さまざまな団体の救援規定も、火事と水害を想定したもので、

震災を明記していたものは極めて少ない。学校での避難訓練なども、ほとんどが火災のみを想定したものであった。

一方で、地震学や地質学の立場からすれば、京阪神地方には近い過去に活動した記録がない活断層が多数存在しており、今回の地震はいわば「起こるべくして起こった地震」であったとも言える。特に、今回震源となった六甲山地南麓の断層系については、「活断層の存在するこの地域で、将来都市直下型の大地震が発生する可能性はあり、その時には断層付近で亀裂、変異が起こり、壊滅的な被害を受けることは間違いない」(笠間・岸本 1974)との見解が示されていた。また、「神戸市街地の背後にある六甲山地には活断層と呼ばれる断層系が複雑に走っており、その一部は市街地直下に延長している。これらと地震との関係が、他都市の地震対策とは異なる注目点となる。」(藤田・笠間、1983年)との指摘もされていた。



神戸の断層

市民にとっての「寝耳に水の地震」と、科学的には「起こるべくして起

こった地震」とのギャップが突き付けている課題は重大である。研究者からの警告をまともに受け止めることができず、対策や市民啓発をしなかった行政の責任、情報の発信元である研究機関・研究者のあり方など、いろいろな側面から検討されるべき課題である。そのうちの一つの基本的な問題として、私は小・中・高等学校での理科教育に欠陥があったことを指摘したい。

自然科学の成果や基本的な考え方を市民的素養として普及したり、自然科学と人々の生活や生産を結びつけるために果たす理科教育の役割は極めて大きい。今回の震災で「神戸で直下型の大地震が起こる可能性」の警告の意味を理解できなかった行政など関係者の問題や、その情報を公開し対策を求めることができなかった市民の問題も、突き詰めていったとき、理科教育の不十分さによる「学力不足」が深くかかわっていたとはいえないだろうか。「大地震の可能性はある」という場合、それは「明日かもしれない」し、「数百年後かもしれない」という不確かさを持っている。人間の生活レベルとはかけ離れた周期を持った大地の動きを問題にしている。そのような理解をも含めた「学力」があれば、行政には長期的・計画的な対応が十分に可能であっただろう。市民も正確な情報を入手して、冷静で科学的な対応が多少ともできたのではないだろうか。

(次号・大地の科学の軽視)

全国から送られた義援金を元に行った

「春休み子ども劇場」



劇団コーロの「まよいねこのもり」は大成功でした。

希望者が多かったので、急きょ会場を変更しましたが、抽選の結果750名の参加者で、楽しく鑑賞できました。全国のみなさん有り難うございました。実行委員で参加された学童の桜井さんの感想と、当日参加された方から後日寄せられたお手紙を紹介し、成功のご報告に変えたいと思います。

「子どもたちに豊かな文化を」実行委員に参加して

神戸市学童保育連絡会 副会長 桜井由賀

厳しい環境の中、
健気に頑張る子どもたち

1995年1月17日神戸の子どもたちは、震災を経験しました。揺れの怖さ、その後の火事、食事がまともにとれない、家がつぶれる、他の地域の子どもたちが経験しないことを、それぞれの地域で、それぞれの成長段階で受けたショックは、忘れたくても身体が覚えておくこともあります。当日のことは覚えていなくても、両親が働きに行かなくてはならず、親戚の家に疎開したこと、家が全壊し、まだ元いた地域に帰れていないこと、地域の公園にはまだ仮設住宅が建ち並び以前のように遊び回り走り回ることができない、子どもの生活環境は100%復興したとは思えません。でも私たち大人がどんなにこの状況を嘆いていても、子どもたちは日々成長しています。

豊かな文化を求めていた時に

社会的にこの状況を打開する運動を強めることと、子どもたちに今豊かに育つ何かを提供することが大切だと思っていました。そんな時に全教神戸のみなさんから何か子どもたちのために催し物を…と声をかけられ、是非ご一緒したいと思い実行委員会に参加する事に決めました。

共同学童保育所の子どもたちは市内で600~700人程度で、最初の予定会場では少しまだ空きがあるので一般の子どもたちにも呼びかけたところ、応募が殺到しました。値段が手頃ということもあったとはいえ、子どもたちに文化をと願っている人がたくさんいることが分かり、急きょ会場を変更したくさんの子どもたちが観劇することができ、本当に良かったと思います。

「とっても楽しかった」

子どもたちの感想は、会場が広くなったせいで前の席で観た子どもと後ろで観た子どもとではお芝居の感じ方が違うのですが、間近に観た子どもたちは役者さんの表情・躍動感を含め食い入るように観、とっても楽しかったと聞いています。私たちの学童が一番後ろで観たのですが、生き物を育てている子どもは「人間が勝手に犬とか猫とか捨てたらあかんねんなあ。」とか「ダンスがかっこ

よかった。」「猫ってしゃべるの？」などそれぞれの学年がそれぞれの受け止めをしたようです。

子どもたちは本当に集中して観ることができていたと思います。子どもたちの中に何か残るものがあったと思うし、この事で震災のいやな思い出がすぐ消えるわけではないけれど、もっともっといろんな経験をし、強く逞しく育ててほしいと思います。本当にありがとうございました。

先日、3月26日に神戸文化ホールで開かれた「春休み子ども劇場」では、小学2年生の娘と観劇させていたとき、とても楽しいひとときを過ごすことができました。スタッフの皆様には心からお礼を申し上げます。

娘は、子供が物心ついた頃から、生か音楽やステージ・舞台などで本物の素晴らしい感動を味わって欲しいと思っていました。残念ながらこういった機会が少なく、お父さんお母さん、知らない子供はじっと座って見ていられたらいいのに、緊張やせいへ、異常にトイレが近くなって度々席を立つて迷惑をかけたので、正直、親の肩身がせまい思いをするのが多かったように思います。(そんな状態でも子供は見ていないようで、しっかり見て楽しんでいたので安心...) 子供と対象とした企画を運営するのは何かと苦労が多いことと、思っています。いつもありがとうございます。継続して実行して下さる皆様、ようこそグループが来ることを、娘もよくよく落着いて観劇を楽しめるように成長させたい。帰道にも「おもしろかったね」とよく話し話しています。テレビビデオでは決して得られない、ライブ感動を体験し、お観劇マナーを身につけることのできる、こういう機会に、いかに多くの子供にさせることが大切だと感じました。(中略)

参加者から寄せられた感想



劇団員へ花束を贈る子どもたち